

世界の3大宗教

— ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の関係 —

目次

イントロダクション.....	1
1. 問題意識の確認 日本人の盲点：宗教.....	1
2. 当セミナーのゴール 3つの質問への回答.....	1
I. ユダヤ教.....	2
1. 聖典.....	2
2. ユダヤ教の歴史.....	3
II. キリスト教.....	6
1. 聖典.....	6
2. キリスト教の歴史.....	6
III. イスラム教.....	8
1. 聖典.....	8
2. イスラム教の歴史.....	8
3. イスラム教の基柱.....	9
IV. 三大宗教の新しい潮流.....	10
1. 19世紀末：シオニズム運動.....	10
2. 第二次世界大戦とホロコースト.....	10
3. イスラエル建国と預言の成就.....	10
4. イスラム教的世界観.....	10
5. イスラエル抹殺は、アラーの名誉回復の戦い（ジハード）.....	11
6. イスラム教徒の自己認識.....	11
7. イスラム原理主義に基づくテロリズム.....	11
V. 終末預言.....	12
1. 3つの歴史観.....	12
2. キリスト教とは歴史観である.....	12
3. ユダヤ人の国の再建と患難時代.....	12
4. メシアの再臨.....	12
5. 新しい天と新しい地の約束.....	13

イントロダクション

1. 問題意識の確認 日本人の盲点：宗教

- (1) 江戸時代のキリシタン迫害から来るキリスト教への偏見。
- (2) 明治以降の国家神道への反発。
- (3) 戦後の、経済至上主義。
- (4) 科学万能主義。

2. 当セミナーのゴール 3つの質問への回答

- (1) ユダヤ教の神、キリスト教の神、イスラム教の神は、同じか？
- (2) 中東紛争の本質は何か？
- (3) 聖書預言によれば、これからの世界はどうなるのか？

I. ユダヤ教

1. 聖典

(1) 聖書（いわゆる旧約聖書）

- ①トーラー（モーセの5書）
- ②ナビイーム（預言書）
- ③ケトゥビーム（諸書）

(2) ミシュナ

- ①前5世紀から紀元2世紀までの律法の解釈と口伝律法の集成
- ②紀元1世紀のタンナイム（賢人）、ヒレルとシャンマイの解釈が中心
- ③ユダ・ハ・ナシが2世紀に編纂

(3) ゲマラ

- ①アラム語で完了の意味を持つ。ミシュナの注解
- ②パレスチナ系のゲマラは、390年テベリアで編纂された。
- ③バビロニア系のゲマラは、500年ごろに編纂された。

(4) タルムード

- ①前5世紀から1200年をかけて議論してきた律法解釈の集大成
- ②ミシュナがその中心にあり、ゲマラと中世以降のラビの注解が加わる。
- ③エルサレム・タルムード（5世紀）とバビロニア・タルムード（6世紀）
- ④後者は、アラム語とヘブル語で書かれており、分量は前者の3倍
- ⑤普通タルムードとは、バビロニア・タルムードを指す。

- (5) ラビ（教師、律法学者）の存在
 - ①聖書の学び（暗誦）は 10 代で終え、残りの生涯はタルムードの学び
 - ②暗誦していることと、理解していることとは別
 - ③一般のユダヤ人はラビ・コンプレックスがあり、ラビの意見に盲従

2. ユダヤ教の歴史

- (1) 創世記こそ聖書の土台
 - ①創造主の存在
 - ②創造主がいるから罪の概念が存在する。
 - ③「罪」とは的外れの状態を指す。
 - ④罪によって死が世界に入った。
 - ⑤聖書は、神の人類救済のドラマである。

- (2) アブラハム契約
 - ①創世記 12 章（無条件契約）
 - ②民族的使命意識の誕生
 - ③よい選民意識と悪い選民意識

- (3) 出エジプト体験に基づく民族的アイデンティティ
 - ①奴隷から自由の民へ（安息日の設定）
 - ②幕屋（神殿）の役割（礼拝の場）
 - ③モーセの律法の役割（祭司の民として生きる道）
 - ④約束の地カナン（祭司の民として活動する舞台）

- (4) カナン定住
 - ①士師たちの時代
 - ②王政に移行：初代の王はサウル（ベニヤミン族）

- ③黄金時代前期：ダビデの時代（前 1010 年）
- ④黄金時代後期：ソロモンの時代（前 970 年）
- ⑤ダビデはユダ部族出身。メシアの先祖となる。

(5) 崩壊の時代

- ①民族的使命意識の喪失
- ②南北朝に分裂（前 931 年）
- ③北の 10 部族：アッシリヤ捕囚（前 722 年）
- ④南の 2 部族：バビロン捕囚（前 586 年）

(6) バビロンからの帰還（前 538 年）以降

- ①神殿の再建
- ②律法主義への回帰
 - * 律法学者エズラによる改革
 - * 新約時代のパリサイ派と後代のユダヤ教の源流
- ③アレクサンダー大王とヘレニズム文化
- ④シリアのセレウコス朝との戦い
- ⑤独立の時代：ハスモン朝時代（前 142 年～前 63 年）
- ⑥ローマ時代（前 63 年～紀元 324 年）

(7) イエスの時代

- ①熱心党（反ローマ、国粹主義）
- ②パリサイ派（律法学者、反ローマ）
- ③サドカイ派（祭司階級、親ローマ）
- ④ヘロデ党（親ローマ）
- ⑤エッセネ派（隠遁主義、死海写本で有名）

(8) イエスの十字架の死と復活

- ①パリサイ派から見ると神への冒瀆

- ②サドカイ派から見ると既得権益を失う恐れ
- ③少人数のユダヤ人が信じた。
- ④ペンテコステ（7週の祭り）の日に聖霊が下り、教会が誕生。
- ⑤ユダヤ教は、普遍的な宗教になった（これがキリスト教）。
- ⑥新しい概念ではなく、アブラハム以来存在していた概念。

(9) エルサレム陥落と世界各地への離散（70年）

- ①安息日、祭り、食事、服装
- ②エルサレム帰還という夢
- ③そして、迫害がユダヤ人を支えた。
- ④神殿が崩壊して以降のユダヤ教は、パリサイ的ユダヤ教
- ⑤ディアスポラの地で、ユダヤ教は状況に適応していった。
 - * 正統派
 - * 改革派
 - * 保守派

II. キリスト教

1. 聖典

- (1) 旧約聖書 (39 卷)
- (2) 新約聖書 (27 卷)
- (3) 外典 (それを認めるかどうかで、カトリックとプロテスタントは異なる。)

2. キリスト教の歴史

(1) キリスト教はユダヤ的な宗教

- * イエスはユダヤ人であり、弟子たちもユダヤ人
- * 初代教会はユダヤ人の共同体
- * 聖書は、旧約聖書も新約聖書も、ともにユダヤ的な文書

(2) 「救いの教理」

- * イエスは神の子 (三位一体の神の第 2 位格) であり、メシアである。
- * イエスの死は、「世の罪を取りのぞく神の小羊」としての死。
- * 信仰と恵みにより、救われる。
- * アブラハム以来、人は同じ原則で救われてきた。
- * ユダヤ教の救いとの違い：ユダヤ人なら救われている。

(3) 紀元 70 年以降、異邦人信者はユダヤ人と距離を置こうとする。

(4) 4 世紀以降、異邦人中心のキリスト教に変質していく。

- * ユダヤ的ルーツの否定
- * ユダヤ人への祝福は教会が継承したとの神学 (置換神学)

- (5) 中世において、教会は反ユダヤ主義的組織となる。
- *ユダヤ人はキリスト殺しの犯人
 - *聖地エルサレムを奪回しようとする十字軍の蛮行
 - *宗教改革でさえも、反ユダヤ主義から脱却していない。
- (6) シスマ：1054年の東西分裂（東方正教会とローマ・カトリック教会）
- *教理的理由：聖霊は「父から」流出するか、「父と子から」か。
 - *政治的理由：西ローマ帝国崩壊後、神聖ローマ帝国下に結集した勢力と、東ローマ帝国（ビザンチン帝国）との戦い。
- (7) その後、東方正教会はさらに分裂（キリストの単性論主張）
- *東方諸教会（コプト正教会、エチオピア正教会、シリア正教会）
- (8) 西方教会は宗教改革で分裂（16世紀）
- *プロテスタントの誕生
 - *1517年、ルターの95カ条の論題
 - *ツウイングリの改革（チューリッヒ）
 - *カルバンの改革（ジュネーブ）

Ⅲ. イスラム教

1. 聖典

(1) コーラン（クルアーン）

- * 神（アッラー）がおおよそ 20 年にわたってマホメットに与えた啓示
- * 彼の死後、人々が記憶していたものを結集し、定本確定。

(2) スンナ（マホメットの言行録）

(3) ハディース（伝承）

(4) コーランは難解

- * イスラム教徒にとっては、神の永遠なることば
- * イスラム教の基本は「神への服従」、「コーランのことばに従うこと」
- * 物語性がない。歴史的背景が分らないと、理解できない。
- * 旧新約聖書の知識を前提としている。
- * 矛盾と思われるような箇所が多い。

(5) 基本内容

- * 信条：神、罪、救い、死後の裁き、天国と地獄
- * 倫理：行動原理
- * 法的規範：神に対するものと、人間に対するもの

2. イスラム教の歴史

(1) 7 世紀前半、アラビア半島で誕生

(2) 約 360 の偶像と、12 万 4 千人を超える預言者がいた。

(3) マホメットは偶像礼拝を嫌った。

- (4) ユダヤ教徒とキリスト教徒に友好的
- (5) 後に、敵対的姿勢を取る
- (6) アブラハムの一神教は、イスラム教において復活したとの主張
- (7) ユダヤ人たちは、キリスト教圏よりもイスラム教圏で安定した生活を営む。

3. イスラム教の支柱

- (1) 信仰告白：アッラーのほかには神はなく、マホメットはその使徒である。
- (2) 礼拝：日に5回神を礼拝する。
- (3) 喜捨：貧困者への施し
- (4) 断食：第9月、ラマダン月は、日の出から日没まで断食する。
- (5) 巡礼：一生に一度はメッカを巡礼する。

IV. 三大宗教の新しい潮流

1. 19世紀末：シオニズム運動

- (1) 帝政ロシアを中心に高まってきたユダヤ教徒迫害（ポグロム）
- (2) ユダヤ民族国家実現への取り組み
- (3) 1897年の第1回世界シオニスト会議（スイスのバーゼル）
テオドール・ヘルツル（1860～1904）の活躍

2. 第二次世界大戦とホロコースト

- (1) 6百万人のユダヤ人の虐殺
- (2) キリスト教西洋諸国への衝撃
- (3) イスラエル建国を容認する機運

3. イスラエル建国と預言の成就

- (1) キリスト教のユダヤ的ルーツに目覚める人々の出現
- (2) ユダヤ人への伝道方法の大転換とメシアニック・ジューの出現
- (3) イスラエルを支援するキリスト教徒の増加（ネオコン）
- (4) カトリックとユダヤ教徒との和解
- (5) イスラエル国会で、「クリスチャン同盟者幹部会」設立
- (6) 中東問題は、ユダヤ・キリスト教的世界観とイスラム教的世界観の対立の様相を深めている。

4. イスラム教的世界観

- (1) ダール・アルイスラム：イスラム教支配下の地域
- (2) ダール・アルハルブ：戦争を行なうべき地域

- (3) ダール・アルアフ：条約下の地域
- (4) 武力による勢力拡大が、イスラム教生成期から DNA のように存在する。

5. イスラエル抹殺は、アラーの名誉回復の戦い（ジハード）

6. イスラム教徒の自己認識

- (1) イスラム国家の衰退の原因は、米国帝国主義とシオニストにある。
- (2) イスラム原理主義運動：民主主義は、神を冒瀆するもの。
- (3) 世俗化したイスラム社会の変革
- (4) ソ連のアフガニスタン侵攻の理解（1979年～89年）
 - * 奪われた土地の奪還：聖戦（ジハード）

7. イスラム原理主義に基づくテロリズム

- (1) 「文明の衝突か、2つの時代の衝突か？」
- (2) 文明の衝突（アメリカの政治学者 S・ハンチントン）
- (3) 民主政治（21世紀の精神構造）と独裁政治（中世の精神構造）の衝突
- (4) 近代世界を受け入れる者とそれを否定する者との戦い（ブレア首相）

V. 終末預言

1. 3つの歴史観

- (1) 循環史観
- (2) きまぐれ史観
- (3) 直線史観（歴史はある目標に向かって動いている）

2. キリスト教とは歴史観である

- (1) 「初めに」（創世記1：1）から「しかり。わたしはすぐに来る」（黙示録22：20）に動いていく時間。
- (2) 歴史とは、ヤハウェなる神が有限な空間と時間に介入された記録。
History = His Story
- (3) 使徒信条の中に、「ポンテオ・ピラトの下に苦しみを受け」とある。
- (4) クリスマンは歴史の意味を知っていると同時に、まだその意味を完全には知らない存在である。終わりの時になって神の視点から歴史を見ることが許されるのである。
- (5) クリスマンが歴史を読み解く原則は、アブラハム契約である。

3. ユダヤ人の国の再建と患難時代

- (1) 再建は、アブラハム契約の部分的成就
- (2) 患難時代（黙示録）は、アブラハム契約の残りの部分の成就につながる。
- (3) 患難時代とハルマゲドンの戦い、そして、ユダヤ人の回心

4. メシアの再臨

- (1) 地上に成就する「神の国」（メシア的王国、千年王国）
- (2) イザヤ書19：23～25の預言は、この時に成就する。

「その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。

その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。

万軍の主は祝福して言われる。『わたしの民エジプト、わたしの手でつくったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように』」

5. 新しい天と新しい地の約束



【MEMO】